

ものを使い、まわりは白い花に包まれ、一角の紫色の「蘭」
がくつきりと浮かぶという簡素だが風格のある先生らしいお
姿でこれも注目を浴びた。

学会から多くの方々が、中には遠方からお越し頂いた方も
おられたが、ご協力下さったことを心からお礼申し上げます。

(大村 敏郎)

例会記録

九月例会 平成八年九月二十八日(土)

神奈川県医師会館一階ホール

(神奈川県地方会と合同で行われた)

一 横浜軍陣病院の介抱女

中西 淳朗

一 明治二十八年に看護婦が著した

伝染病看護の本について

平尾眞知子

一 ペスト残影 その六

〔医師アンデルナッハについて〕

滝上 正

特別講演「P・F・シーボルトと日本の医学」石山 禎一

十月例会 平成八年十月二十六日(土)

順天堂大学医学部八号館三階会議室

一 「大同類聚方」の問題点―同撰―について 後藤 志朗

一 「医則発揮」の著者河津省庵と門人山川揚庵 石原 昂

一 疾病史から見た『傷寒論』 中村 昭

お詫びと追加

編集委員会の不手際により、一昨年及び昨年の例会記録が
未掲載となっております。深くお詫び申しあげますと共に、
ここに掲載いたします。

十月例会 平成四年十月二十四日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 ミラノ・ラ・グランダ病院一六四二年版

「規則」に就いて

西大條文一

一 わが国最初の義足装着者三世澤村田之助と

義足製作者松本喜三郎

坪井 良子

十一月例会 平成四年十一月二十一日(土)

新宿野村ビル十七階コニカ会議室

(藤浪剛一先生五十年祭)

司 会 慶應義塾大学放射線診断科教授 平松 京一

開 会 慶應義塾大学放射線科教授 橋本 省三

挨 拶 日本医史学会理事 蒲原 宏

挨 拶 慶應義塾大学医学部長 細田 泰弘

御経歴紹介 慶應義塾大学医史学客員教授 大村 敏郎

講 演

一 「兄・藤浪鑑先生のこと」

日本医史学会理事 岡田 靖雄

一 「教室開講と放射線物理学」

慶應義塾大学放射線科教授 橋本 省三

一 「藤浪剛一先生の思い出」

大阪市立大学名誉教授 玉木 正男

閉会

日本医史学会常任理事 酒井 シツ

十二月例会 平成四年十二月十九日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

(洋学史学会と合同で行われた)

一 久米邦武について

高田 誠二

一 時衆・遊行聖における病の意味

新村 拓

一 ビデオ鑑賞「狂気の立ち会い人―呉秀三」岡田 靖雄

一月例会 平成五年一月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 金沢貞顕文書の医史学的研究

樋口誠太郎

一 長山泰政先生―戦前に院外療法を提唱した精神科医

岡田 靖雄

二月例会 平成五年二月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

(医科器械の歴史研究会と合同で行われた)

「医科器械の歴史」研究助成 贈呈式・受賞者発表

一 日本における臨床検査機器の発達編纂史 寺畑 喜朔

一 内視鏡の歴史―胃内視鏡を中心に 多賀須幸雄

一 消化管内視鏡の歴史 丹羽 寛文

一 消化管縫合器並びに吻合器の研究 中山 隆市

三月例会 平成五年三月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 身体語・病名などの美称 (euphemism) の由来

三輪 卓爾

一 明治初期の私立医学校「済生学舎・慶応義塾医学所

・成医会講習所について」 唐沢 信安

四月例会 平成五年四月二十四日(土)

順天堂大学医学部新館階段教室

一 中世ヨーロッパの衛生思想 Six non naturals と

ナイチンゲールの看護思想について 平尾真知子

一 肝と肝臓―「中医学の肝とLIVER」 宮川 浩也

六月例会 平成五年六月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 森鷗外と医学留学生たち

山崎 光夫

一 ベルツのこと―ビデオ供覧ならびに解説

酒井 シツ

九月例会 平成五年九月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 ウイリアム・K・バルトンのこと

―ビデオ供覧ならびに解説 遠藤 正治

一 医事余聞―「医外史」 小池 猪一

十月例会 平成五年十月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一 家康・綱吉と医業 小曾戸 洋

一 三浦梅園の生理学体系―とくに臟腑・経脈・筋骨

の機能について 近藤 均

十一月例会 平成五年十一月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 橋本博士と橋本病―ビデオ供覧ならびに解説

酒井 シヅ

一 J・B・シッドールの衛生指導

中西 淳朗

十二月例会 平成五年十二月十八日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

(日本薬史学会と合同で行われた)

一 日本の Insulin 研究 特に魚類の Insulin について

末廣 雅也

一 上山藩医奥山玄育と荻野元凱

深瀬 泰旦

一 賀川流産科について(補遺)

杉立 義一

一月例会 平成六年一月二十二日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 『癲癇狂經驗編』の著者 土田獻による下氣圓引き札

岡田 靖雄

一 風病の治療史

蔵方 宏昌

二月例会 平成六年二月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 ケガレと臓器移植

杉田 暉道

一 幕末薩摩藩と大円寺

中西 淳朗

三月例会 平成六年三月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 横浜・太田陣屋の研究

中西 淳朗

一 近世日本の医薬界における神農画賛流行の背景

小曾戸 洋

四月例会 平成六年四月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 日本における養生論の展開

瀧澤 利行

一 十七世紀に來日したオランダ人医師

酒井 シヅ

六月例会 平成六年六月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一 『金光明最勝王經の医療とアーユルヴェーダ』

杉田 暉道

中田 直道

九月例会 平成六年九月二十四日(土)

神奈川県医師会館一階ホール

(神奈川県地方会と合同で行われた)

一 ペスト残影 その三

滝上 正

一 横浜市根岸外国人墓地に残る小児の墓

佐分利保雄

一 浅野総一郎とコレラ

荒井 保男

特別講演「やみの医療 鳩鳥トビチヨウ―実在から伝説へ―」

真柳 誠

十月例会 平成六年十月二十二日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 経済史・科学史の両面からみた江戸の本草と薬園

ハイドロン・ライセン・ヴェーバー

一 アユルヴェーダのトリドローシャ説と仏教医学の

四大不調説の比較検討 遠藤 次郎・中村 輝子

十一月例会 平成六年十一月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一 ハンガリーのゼンメルウィスの遺跡を訪ねて 蒲原宏

一 A. Vesalius "Eptome"のラテン語原点および

独・蘭・仏・英語版の特色 その一 近藤 均

十二月例会 平成六年十二月十七日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

(日本薬史学会と合同で行われた)

一 藤浪剛一蒐集の先哲医家墓碑本群 小曾戸 洋

一 ふぐ毒研究史 末廣 雅也

一 ヴィデオ供覧「呉家の人びと(野間祐輔先生出演)」

岡田 靖雄

一月例会 平成七年一月二十一日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 憑きもの再論 岡田 靖雄

一 帝国大学医学部の歯科の設置 榎原悠紀田郎

二月例会 平成七年二月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 傷寒論不可篇の検討 呂愛平・遠藤次郎・中村輝子

一 ロンドン病院博物館報告 山根 信子

一 漢代の解剖学 家本 誠一

三月例会 平成七年三月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 永富独嘯庵(漫遊雜記)にみる神経症概念について 小曾戸明子

一 明治初期の軍医像と軍医募集の実態 黒澤 嘉幸

一 算作阮甫『産科簡明』の原著者と原著者について 石原 力

四月例会 平成七年四月二十二日(土)

順天堂大学医学部九号館六番教室

一 三人の玄良と一人の虎章―奥山虎章について― 深瀬 泰且

一 我国医学界初のX線実験―臨床講義者・丸茂文良― 唐沢 信安

五月例会 平成七年五月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館八番教室

一 十九世紀アメリカ非正統医療における 癒し・出産・自己形成 鈴木 七美

一 陰 陽―中国古代医学の枠組み概念 其の一― 家本 誠一

九月例会 平成七年九月三十日(土)

神奈川県医師会館一階ホール

(神奈川県地方会と合同で行われた)

一 熱海噺汽館について 尺 次郎

一 前近代の受胎調節をめぐって 新村 拓

一 鎮將府日誌について 中西 淳朗

特別講演「田辺一雄と複十字会」 田辺 正忠

十月例会 平成七年十月二十八日(土)

城官寺(東京都北区上中里)

多紀元堅生誕二〇〇年記念講演会

一 江戸医学館の巨峰 多紀元堅 矢数 道明

一 多紀元堅の著述 真柳 誠・郭 秀梅

一 多紀元堅の墨跡 町 泉寿郎・小曾戸 洋

十一月例会 平成七年十一月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館八番教室

一 尾張藩の薬園図について 遠藤 正治

一 ビデオ供覧『リデルとライト』

十二月例会 平成七年十二月十六日(土)

順天堂大学医学部八号館一階教室

一 不潔の水を善水にする法

一 スウェーデン法は正しいか 中西 淳朗

一 放射線医学二〇〇年 山田 光男

一 X線発見から放射性医薬品まで

一 藤浪鑑先生の医史学的検証 杉立 義一

一 藤浪肉腫・ウイルスについて

例会抄録

横浜軍陣病院の介抱女

中西 淳朗

いわゆる横浜軍陣病院の日記(日本医史学雑誌・復刻版第一七巻附録・昭和一九年・恩文閣出版)から、介抱女の記事を抽出しその実態について研究し以下の結果をえた。

一、開院当初に薩摩、伊州両藩の入院負傷兵八人に対し、雇入れた介抱女は五十才以上の老女であった。従って昼夜つづけての勤務はきついので増員を要求した。その結果、八人雇入れの予定が十一人となってしまった。

介抱女の雇入れについては、この閏四月二十日の記事以外は全く記入されていない。

二、介抱女の給与は、他の職員より高く、肉体労働が一応認められた形であったが、九週間もたつと病院運営費に困り、賃金の引下げが行なわれた。それでも一日銀一五匁(二朱 \parallel 五匁 \parallel 約七千五百円)が支払われた。

小役人は一日銀六匁であった。

三、介抱女への金の支払いは、賄方で行ったようで、八月二十六日の記事に「賄方が発行する木札の裏に会計判据る」